

院内集会「ストレステスト・再稼働問題の徹底検証」報告

文責：長谷川泰司(プラント技術者の会)

日時：2012年7月30日(月)17:00～19:30

場所：衆議院第一議員会館 多目的ホール

集会には、福島社民党党首、平山誠衆院議員、橋本べん衆院議員の3名の国会議員を含め、約80名の方々が参加され、盛況であった。

最初にプラント技術者の会、川井さんが「原子力行政に関する終わりなき戦い」という題で約20分総括的な話をした。中間総括として、「井野、後藤両委員の厳しい質問に何一つ正面から答えられない状況の中で、安全性に関する説明も責任も曖昧なまま安全宣言が行われたことなど、市民の前にストレステストの欺瞞性を明らかにできた」事を挙げた。又「今何が問題か」として、「耐震バックチェックがキチンとされていないし、多くの技術的問題の積み残しがある」ことを挙げ、最後に「終わりなき戦い」として、「8月中に7基の審査書が提出される可能性があり、また、新規制庁で意見聴取会が継続される可能性が強いが、今までと同様欺瞞性を暴いていきたい、原発の問題は生存権の問題でもある、という認識を堅持して、粘り強く戦っていきたいと考えている」と結んだ。

次に、元原子力プラント設計技術者であった後藤さんが「原発設計技術者の立場から、意見聴取会での検証を振り返る」として、講演した。彼は、「1982年以降原子力発電の安全対策について実施してきたにもかかわらず、今回の事故が起ったことが問題、では何事故が起るか、安全に関する閾値はだれも決められない、つまりここまでやれば大丈夫と誰も言えない、また、事故が起った時に、何がどのような形で起るかは全く予想できない、全ての想定に対する対策を立てることは不可能であり、原発を稼働する限り事故の危険性が伴う。泊に現地調査に行ったが、そこでも対策として信じられないような事をしている、例えば、ポンプが故障して水が流れない時間が長いと給水用ホースの中の水が凍結する可能性があるがそういうことは起こらないことになっている、そういう指摘が沢山ある」として具体例を紹介した。「建物の水密化」に関しても様々な問題があることを指摘、大飯、志賀の活断層に関する問題にも触れ、安全哲学がない日本の原子力行政を「犯罪的」と断罪した。

ここで、平山誠衆議院議員と福島社民党党首が挨拶。二人とも、いま最もホットな原子力規制庁の人事問題について、「今回の人選を疑問視する、あるいは反対する国会議員が少なからずおり、この人事を阻止するよう活動していく」という意思表示がなされた。

次に、元JNES検査部の藤原さんから「技術的な課題は解消されたのか」というタイトルで、関電大飯発電所の制御棒挿入時間に関する恣意的変更の問題について、関電作成の資料に基づいた詳細な説明があった。即ち、2011年の地震以前に出された制御棒挿入時間が2.16秒と報告されていたにもかかわらず、2012年のストレステストの報告では1.88秒に変わっていた。

使っている式は全く同じであり、変更しなければならない論理的な整合性は全くない。3.11の福島事故を受けて、2.16秒では安全裕度が不足するために、何の根拠もないまま1.88秒に引き下げたとしか考えられない、という事を、数式を使って説明したものであった。

ストレステスト意見聴取会の井野先生は「ストレステストの問題点と今後の規制のあり方」というタイトルで講演された。「枠組み」、「前提」、「内容」という3つの観点からストレステストの問題を整理されて話されたが、とりわけ、「放射能汚染を評価せず、住民が結果の是非の判断を行えない情報提供をしている」事、「専門家の判断が市民の常識とかけ離れており、市民の判断をサポートする情報提供になっていない」事、また、「2次評価は今後の改善という位置づけの為、全くやっていない。2次評価を12月までに出すスケジュールになっていたが、再稼働と関係ないから未だまったく出ていない」事を指摘し、ストレステストを厳しく指弾した。また、井野先生は「高経年化意見聴取会」の委員も務めており、そこで脆化予測式が間違っていることを指摘したが、「規程の見直しは学会で行うべき事」として退けられた。「高経年化意見聴取会では、福島事故は脆化に関係ない、玄海1号は間違った式を使っているにも関わらず健全だと言い張る」と訴え、安全保安院の原発推進の頑な姿勢を批判した。

井野先生の話しが終わったところで、橋本べん衆議院議員が、挨拶をかね原子力規制委員会人事の件で疑問を呈し、白紙撤回を要求していくと発言した。又、ここで一旦講演を中断し、フロアからの質問を受け付けた。

●さいたま市Aさん：活断層の調査を行う掘削業者が分かれば教えてほしい。

福島議員：渡辺先生など、活断層ではないか、と疑問を呈している方を入れろ、と要求している。

橋本議員：ただ、関電は、関電の業者を使うような雰囲気であった。

●横浜(女性)：斑目さんは反省しているようだ。そういう人に入ってもらったらどうか。

福島議員：(原子力村の)斑目さんを入れるのは難しいだろう。

●埼玉Bさん：放射脆化の件に関係して不発弾との違いを井野先生に質問(内容把握できず)。

●札幌Cさん：泊では活断層の調査がされていないがその辺の情報はるか。

後藤さん：泊については、具体的に把握していない。ただ、現時点で活断層が見つかっていないのは、玄海、川内だけでも言われている。地震列島と言われる日本では、活断層がない方が不思議な程だ。

●内部被ばく研究会Dさん：①後藤さん：PWR(加圧水型)の吹き飛ぶ可能性について ②

藤原さん：先ほどの1.88という数字は、関電と保安庁が電話で決めたことと美浜の小山さんから聞いたが、その情報はご存じか ③井野さん：クラスタ脆化式のもう少し詳しい説明をお願いしたい。

井野さん：クラスタ脆化式は、経年で銅が集まってくる現象を表現したものであり、たとえば言うところ2人の人が相手を探すのに、1人が動かないで1人だけで探すのと、2人が両方動いて探すのではどちらが早く相手を探し出せるか。という問題。どちらも変わらない、というのが

正解なのだが、問題の式は、2人が動き回って探した方が早いという論理を押し通した。

後藤さん：PWRでも熱や衝撃的荷重等で圧力容器がパリンと割れる可能性がある。だから怖い。イベントツリーは内部的、構造的なことは問題にしていないが、パリンとわれる危険性もある。

藤原：その話は知らなかったが、そういう事をやれば不合格の原発の全てが合格になる。

質問はまだまだあったがいったん打ち切り、市民運動という観点から「意見聴取会の公開性と参加型民主主義」という題で、杉原さんが話をした。杉原さんは、傍聴を続けてきて感じたこととして、「1月の朝日新聞の利益相反のスクープ記事が大きなインパクトとなった事、その件で1月6日、岡本委員長が井野、後藤両委員から厳しく追及され、1月18日の意見聴取会では、市民の激しい抗議に保安院は傍聴者締め出しを行わざるを得なくなった。それをメディアが大きく報道し、ストレステストの問題が明らかになった、という一連の流れの中で、20日間ストレステストの審査が延びた」、と述べた。「とにかく正当性がないという事を言い続けた、傍聴は民主主義における最後のセーフティネットであり、そこでの不規則発言などは緊急避難的行動として意味を持つものである」と主張、最後に原子力規制委員会について「規制庁でなく、寄生庁になる危険性がある。今回の件でも分かったが、事務局の強大な権限を変えなければならない。今回の人事を誰が何を決めるか、という点で私達は活動していく」と結んだ。

最後に弁護士の只野さんが「今後の原子力規制のあり方」というテーマで話をした。只野さんは、浜岡原発の訴訟団の弁護士を務めており、まず「浜岡原発は終わっていない。何時動いてもおかしくない状況にある。中電は浜岡を動かすため、防波堤の建設などに巨額のお金を使っている。廃炉にする気はさらさらないと浜岡原発の状況を報告。全国の原発で訴訟が始まっており、女川が残っているだけ、弁護士が次々と行動し始めている事、また、規制委員会の委員長候補には、「安全基準についてどう考えているか、40年を厳格に守るのか、といった簡単な質問をすべき」との提案をした。また、「今の法律では、昔の規制に関して新しい理論を適用する様になっていない」というおかしな運用になっている事、「訴訟の傍聴も市民に開かれている。ストレステスト意見聴取会等、政府系の委員会だけでなく、訴訟にも積極的に参加してほしい」と訴えた。

最後に質問を受けた。核燃料サイクルについてのストレステストがどうなっているか、違いはあるのかという質問で、後藤、井野両委員が答えた。

後藤委員：ストレステストという事では、通常の原子力プラントと異なる。放射能がめちゃめちゃ多いため修理にも入れないという点が大きく異なる。

井野委員：もんじゅはストレステストをやるらしい。特徴を述べた報告がでたが良いことだけを述べていた。核燃サイクルについては別の意見聴取会が立ち上がった。

以上